

演者にも、その契約で何割という収入がある。

われわれマンガ家でも、単行本が出れば、一冊につきいくらという印税がはいってありがたいのであるけど、日本の映画界では、それが無い。

ヒットして、客がはいってもうかるのは、プロデューサーだけ。

後藤幸一監督作品の「正午なリ」という映画のシナリオを書いた。

原作は丸山健二さん。ATGの映画である。後藤監督は、これが第一回作品である。

大学を出て九年間、ずーっと黒木和雄監督のもとで助監督を勤めてきた。

この黒木監督の薦めで、後藤監督は、大切な第一回作品の脚本をぼくのところへ持ってきた。

映画のシナリオなど書いたことが無い。

「既成のライターにはない、フレッシュな味が出るのでは」と思っ

こう口説かれた。

そんなものかと思った。

ヒマがあればマージャンばかりやっていて、こんなことでいいのだろうか、と思っていたらちょうどそんなときだったので、やってみようという気になった。

シナリオの書き方のABCから勉強した。

そして書きはじめてみると、その作業がマンガとよく似ているのでびっくりした。

マンガは一コマ一コマをつないで話を進めていく。シナリオは一シーン一シーンをつないで話を作っていく。

だからかなり手馴れた感じで、書くことができた。

後藤監督が丸山さんの原作に惚れ込んで、映画化しようとした作品であるし、ATGのほうでも原作が気に入って、映画化に踏み切ったのであるから、ぼくとしては、

原作にできるだけ忠実にシナリオを書かなければいけない(ほんとはそのあたりがつかかったと

ころだけだ)。

決定稿ができ上がった。

これでお役ごめんかと思っただら、製作費の事情やら、出演者の都合やら、それから監督の突然のヒラメキやらで、撮影現場から、手なおしの注文がくる。

それで二度三度、ぼくはロケ現場まで足を運んだ。

撮影がアップになり、編集。この編集にも顔を出してくれといわれ、つき合った。予告編作り、ポスター製作までつき合ってしまった。

結局、初稿に取り組んでから封切りにこぎつけるまでの九カ月、べったりつき合ってしまった。

客の入りはまずまずで、今、ホッとしているところである。

これだけつき合って、ぼくの収入はどれくらいかというところ、ふつうのサラリーマンの年収の十分の一以下。

助監督やカメラマンの人たちもこの程度。

客がいろいろが、歩合制ではな

いので、これつきり。

ほかの世界に比べ、映画にたずさわる人たちは、恵まれていない。

それでも、一度、映画に関わってしまったと、なかなか脱け出せないらしい。

魅力があるのだろうと思う。

たしかに、ぼくも九カ月大変ではあったけど、封切りになった映画を見て、役者が、ぼくの書いたセリフをそのまましゃべって、芝居をしていてくれるので、うれしかった。

そういう魅力がある。それにしても、

「映画って、ほんとうに大変です」ね。

クック・タウンまで

中嶋嶺雄

(東京外国語大学教授)

オーストラリア国立大学での仕事のために一年間をキャンベラで

カラー ブックス

2 新訂 桂離宮
459 日本の陶磁 ⑫ 萩
458 ばらづくり

堤 繁 著
坂田泥華 著
和 田 邦 平 著

「桂では眼が恐推する」とブルノ・タウトにいわせた遺形美を新撮のカラーで訪ねる

古来、茶陶として名声を博した萩の名陶を鑑賞し、その歴史と技法を作者の立場で解説

置型鉢植・二重鉢植・葉面敷布などをとり入れた、どこでも楽しめる新し「ばらづくり」

各430円 千120円

保育社

大阪東区上町1丁目17
 振替 大阪12346
 東京豊島区南大塚1-1

なるが、アメリカで勤続を自慢したら笑われる。同じ会社に、そんなに長くいるほどお前は無能なのかと軽蔑されてしまう。

私のキャスター十五年にも、いくらかそんな意味合いもありそうである。

アメリカといえば、CBSのウォルター・クロンカイトさんから、祝賀パーティの席に祝電をもらった。いうまでもなく、アメリカで最高の権威がある。クロンカイト・ショーのキャスター（あちらではアンカーという）である。クロンカイトさんは、アンカー十六年というから、私よりも一年先輩である。

七年前に、ニューヨークに取材

に行ったとき、私はCBSにクロンカイトさんを訪ね、スタジオのすぐとなりにある彼の部屋で会った。その地位にふさわしく、堂々たる押し出しで、髪も半白でかなりの年配に見えた。クロンカイトさんは、日本から若いキャスターが訪ねてきたといった調子で、いろいろと自分の体験を話してくれた。そして「私と君の共通の悩みは休暇がとれないことだね」などと慰めてくれた。

私は大先輩に会ったつもりで、その話を聞き、貴重な時間を割いてくれたことに感謝した。ところがあとで調べてみると、クロンカイトさんは、私よりも四歳若かった。

シナリオを書く

福地 泡介 （漫画家）

戦時中の映画は、戦意高揚の映画だった。鬼畜米英をやっつけようという映画ばかりだった。日本国民を戦争にかりたてる内容の映画だったわけである。

そして、敗戦。

そういう映画を作った人々たちも、当然、戦犯に問われることになった。

ところが問われたのは製作者だけ。プロデューサーだけが問われ、監督、脚本家、出演者たち

は、

「自分たちは、命令されるままに映画作りをしただけであって、ああいう映画がどういいうぐあいに上映されたかについては、関係がない——」

と、言い逃れた。

つまり、著作権を放棄したわけである。

それ以来である。

それ以来、日本では、監督や脚本家や出演者たちに映画の著作権がなくなってしまった。

いくらヒットしても、興行収入には関係なくなってしまったのである。

外国では、興行収入が上げれば上がるほど監督にも脚本家にも出

過すことになった私は、自分が研究対象にする国ではないとの気安さもあつてか、オーストラリアにかんする予備知識をほとんどもたずに、妻と小六から小一までの四人の子供を引き連れ、日本を発つた。そのような未知の世界での生活は、それだけに印象深かったが、なんといつてもオーストラリアの魅力は、戸外の生活にある。そして、あの独特のワイルドな自然がもたらす数々の衝撃は、旅への誘惑を駆り立てずにはおかない。おかげで私は、ハードな研究生活の余暇をやりくりし、オーストラリアの六つの州、二つの直轄地域のすべてとニュージーランドの南北両島を訪れることができたが、昨年八月から九月にかけての十九日間に互るクイーンズランドへのドライブ旅行は、わが家にとつても「冒険」であつた。

クイーンズランドつまりオーストラリア北東部を行けるころまで北上しようという漠たる目標で、キャンベラの家を発つたが、

まず最初は、第二次大戦中に日本兵捕虜が収容所から集団脱走を試みて失敗し二百数十名が死亡したカウラを経て、世界有数の天体観測所のあるサイディング・スプリングへ行った。

あいすばん

盛岡の雪道をはしらせながら
タクシードライバー氏は
雪よりもアイスバンが難敵ですよ
お客さん
と言つた
そうとも
愛する晩は技術が要ります
ゆきはよいよい終りが難しい
それは 詩でも何でも

川崎洋

墓標に子供たちを額突かせながら、私はかつて厳冬のウランパートル（外モンゴル）郊外の丘陵に、その地で果てた日本人捕虜の墓を訪れたときの粗末な墓石を、遠く対比的に想い起さざるを得な

カウラは今日でこそ日豪親善のモデル都市になっているとはいへ、昭和十九年八月五日午前二時に発生した悲劇の傷跡は生々しく、小高い丘陵に整然と嵌込まれている兵士たちの金属プレートのも

かつた。内陸の山中にある天体観測所への道では、夜空の星がかくも鮮やかな光彩を放つことを初めて知つたが、その夜が土曜日であつたためか、途中のダボの町でも、近くのクイーンズランドの

町でも、モーターやキャラバン・パークその他一切の宿泊施設が満員で、あまり人聞きのいい話ではないが、やむを得ず一家六人、第一日目から車のなかで寒い一夜を過すハメになつた。

翌日はクイーンズランドの州都ブリスベーンまで長途九百キロを一気に走り、これからの北上にそなえることとした。クイーンズランドの太平洋沿岸は、世界一の珊瑚礁プレート・バリア・リーフで知られているが、このあたりはすでに亜熱帯、さらに北上すると熱帯なので植生は日毎に変化する。五日目頃、ロックハンプトンを過ぎてマッケイまでは、またもや夜道であつたが、約三百キロの間、まったく人家も電燈もなく、荒野に道路一本だけというのは、さすがに心細かつた。この間は、帰途、昼間にも走つたが、たまたまオーストラリア名物のエミューを二匹見つけたので、車を停めて望遠カメラで写したりしたことをキャンベラに帰ってから知人に話したと

ころ、このあたりはしばしばギャングが出没するので車を停めずに猛スピードで走りぬけるのが常識になっていとおどかさされた。

クイーンズランド北部の都市ケアンズからは船で珊瑚礁の島グリーン・アイランドに渡り、三日間の休日を楽しんだのち、さらにモスマンへ北上した。ここは、砂糖工場の小さな町である。工場を訪れると工場長が感激して親切に案内してくれたが、この砂糖糖は○○パーセント日本へ輸出されることである。それだけに過般の日豪砂糖戦争のことを思うと、お土産にもつた出来たての砂糖も芳香も甘いとばかりはいつていられない。

このときのドライブ旅行のハイライトはモスマンからさらにヨーク岬半島の内陸部を経由して北上したクック・タウンまでであった。この間の往復六百キロは、言語を絶する悪路であり、これ以上の北上は危険だから安全は保障しないとの立て看板を見つけたとき

には、もはや引き返しがたい地点までできてしまっていた。ときどき行き交う車は、四輪駆動のジープかトラックにかぎられている。あたり一面に巨大な蟻塚が続くこの熱帯内陸のドライブは砂埃りにまみれた苦闘の連続であり、いざとなったら野宿を覚悟かと思われ、子供たちを説得したのだが、かつてキャブテン・クックが探検船を補修するために寄港したという小さな港町クック・タウンにようやく着いたときの浜辺の暮色は、ひとときわ美しかった。

このあたりは、原住民の方が白人より多く、黒白対立を物語る落書きも散見されたが、驚いたことに、町外れのユーカー林のなかに、小さな石造りの中国廟があった。ゴールド・ラッシュ時代の中国人移民の名残りであるが、中国の影は、こんなオーストラリアの最果てにまで広がっているのである。

こうしてクイーンズランド縦貫旅行をさらに一週間余つづけてキ

ャンペラに戻ったとき、車のメーターは七千六百三・ニキロのドライブだったことを示していた。六年生の長男がいうには、この距離は太平洋を隔てた日本とオーストラリアの距離にほぼ等しいという。

S子の場合

小松久子

(画)

小学校三年から五年間、私は家の事情で両親や弟妹たちと離れて、祖母の家で暮した。その家は南側の庭から、隣りの放送局の芝生や助任川、城山、そのむこうの眉山まで見渡せて、静かな落ち着いたたたずまいであった。

隠居所といっても、母屋も離れのどの部屋にも床の間、ちがいがついて、ぜいたくな造りであった。然し子供部屋などはないし、

昔気質の無学な祖母は、筆のけい古や習字にはうるさいが、勉強机

も引出しのない座卓があてがわれたし、そろばんなどは、五つ珠の大きい商家用の、裏に小松旅館などどでかでかを書いてあるものを学校に持って行くように言うので、私は泣きたくなったこともあった。

祖母は数年前まで、その市の中心地で一応、一、二といわれる旅館を経営していた。祖父が死んで商売を続けるのが嫌になり、その名残り一軒屋に年寄りひとりの住む要心から、その家の二階や離れを下宿用に人に貸しており、配属将校や工専の学生など、絶えず三人位の男の人たちが一緒に住んでいた。ねえやもいたし、私は祖母と二人きりのさびしさはなかつたが、転校したばかりで近所に友だちも少なく、学校から帰ると放送局の芝生の上で逆立ちをしたりして一人で遊んでいた。そんなおぼあきん子にとって、学生たちは優しいお兄さん達であった。

算数の宿題を見てもらうこともあったし、クラシック・レコード

を聞かせてくれる人もあつたし、前の川でボートに乗せてくれたりもした。応用化学の学生にもらったピーカーや試験管を、私の城にしていた奥の物置部屋に持ち込み、祖母に内緒で化学の実験らしいことをして、アルコールランプをひっくり返し、火事になりそうになったりもした。私が学生たちのところへ遊びに行くことに、祖母は「男女七歳にして席を同じゅうせずと昔から言うてな」と恐い顔をして叱った。

昭和十六年の十二月八日、開戦の朝みんなの緊張した空気は、その朝の味噌汁の湯気の中にさえ混って、私にも伝わってきた。卒業した学生の中には、ビルマ戦線からハガキをくれた人もあつた。

そんな戦争の最中にもある年、夏休みに二階の配属将校のお嬢さんが、東京から遊びに来てしばらく滞在した。その頃、離れの二階には陸軍主計中尉が住んでいて、世話好きな祖母の計らいで早速その二人がお見合いをすることにな

り、表屋敷に旅館時代のお膳などを並べて、久しぶりに華やいた雰囲気になった。恰幅の良い陸軍大佐の父上の横に、十九歳と言う色白のしとやかなお嬢さんが坐り、向いあつたスマーтона青年将校とは、すこぶるお似合ひであつた。大人たちのそんな様子は、子供の私までもうきうきした気分させ

た。離れの階下には、少し前から祖母の姪の娘、大陸育ちのS子がい

た。胸を思い、二、三年療養して良くなつていたが、あと少し暖かい内地で静養したいと言うので、祖母は病気を気にしながら、しぶしぶ引受けていた。見合ひの結果は不成功で、祖母は美しいお嬢さんが大変な氣に入

りようであつたから、大いに不満足であつた。そのあと中尉とS子の姿を川の堤の桜の下などで夕方、よく見かけるようになってい

た。バレエの選手だつた二十二歳のS子は、大柄で洋服のよく似合う美人であつた。ドストエフスキーなども愛読して、なかなかの文学少女だつたらしい。私にも坪田謙治の「善太と三平」、神近市子訳「科学の学校」などをくれた。何しろ祖母の家にあつた本と言へば、「料理の友」数冊と古ぼけた黒岩涙香の「鉄仮面」が一冊きりという有様なので、私にとつても彼女の存在はすばらしかつた。

S子はシュニベルトの菩提樹や野ばらを原語で唄う。私も「ザイン・クナアヴァイン・ロースライン・ステン」など、真似ていた。彼女のハイヒールやブーツなども、私にとつては都会的に映つた

し、「瀕死の白鳥」をテーマにした「白鳥の死」と言う外国バレエ映画につれて行つてくれたのも彼女であつた。ねえやお嫁に行つて、長い廊下のふき掃除は私の役目だつた。彼女はキュロット・スカート

の裾のヒモを引いて、ブルマーのようにして、手伝つてくれた。女学校の体操の先生のように恰好がよかつた。私も祖母に見

つかれば叱られるが、学校の廊下のように雑巾をおして走つた。女学校に入った春、私は風邪をこじらせて、レントゲン検査の結果、肺門にカゲが出来て、一と月ほど休学した。祖母はそのことを

S子の病氣と直接結びつけて、彼女に出ていってくれと、きびしく言い渡した。戦争はますますはげしくなつて、配属将校も中尉も、もうとつとくに転属になつていた。祖母の家の同居人もあわただしく、新しい人々が出たり入つたりして

いた。B29も四国の上空に飛んでくるようになって、放送局のアンテナが目標になると、祖母はこの家を手ばなして疎開することを考えた。結局、十九年の秋には私たちもここを離れた。

S子はあると渡満して、戦後の引揚げの時の無理がたつて、結核が再発し、間もなく亡くなつた。最後に住んでいた九州から、見憶えのある達筆な字の便りをもたらただけで、逢わずじまいであつた。

文藝春秋

ガルブレイスのニッポン日記 四月号

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
昭和十二年四月一日発行
昭和十二年三月二十五日東京府特別郵便法第三十九号
第五十七卷 第四号

